



# JSPS London

# NEWSLETTER

No.48  
2016.02-2016.04



Cherry blossoms at Kew Royal Botanic Gardens in Greater London

## Contents

### Japanese Articles

- P02. 巻頭特集 「在英日本人研究者ネットワーク(JBUK)の紹介」
- P06. センター長のつばやき⑦「ロンドン奮戦記(2)」
- P09. 英国学術調査報告「イギリス大学院留学生生活と学術支援における研究者交流の重要性」
- P12. Japan Day at University College London: Ever considered studying in Japan?
- P13. UK-Japan Collaboration Public Lecture: The Past and Future Earth - Climate change and co-existing sustainably with nature
- P15. The 9th Choshu-London Symposium
- P17. 在英研究者の者窓から 第7回・レディング大学・林叔克
- P19. 英国の大学紹介(スターリング大学・UCL)
- P22. ぼりーさんの英国玉手箱「何でも自分で直す英国人？」

### English Articles

- P23. Events organized/supported by JSPS London
- P24. LLAKES Research Seminar: Education Policy and Equal Opportunity in Japan
- P25. Pre Departure Seminar and Alumni Evening
- P28. Voice! from Alumni member  
Vol.3 Dr Wolf-Peter Schmidt
- P30. JSPS Programme Information

## 巻頭特集 「在英日本人研究者ネットワーク(JBUK)の紹介」

JSPSロンドン・副センター長・大萱千草

研究と研究者の国際化が進んだ現在では、多くの日本人研究者がイギリスで活躍しています。JSPSロンドンでは、このような在英日本人研究者を日英研究交流の柱となる存在と考え、彼らのネットワークを活かし、研究活動をサポートするとともに、イギリス内外における在英日本人研究者のプレゼンスを高めていくための活動を行っています。

### 在英日本人研究者ネットワーク(JBUK)とは

JSPSロンドンが持つ人的ネットワークのひとつに在英日本人研究者ネットワーク、通称JBUK (Japanese Researcher's Network Based in the UK)がある。JBUKは2006年に始まった緩やかなネットワークで、イギリスの大学や研究機関で活動している様々な専門分野の日本人研究者380人(2016年3月現在)を擁している。

JBUKの活動はその時々々の要請に応じて変化してきた。2006年から2009年の設立・創成期においては、在英の主にPI(研究室主催者)が集まり、JSPSや文部科学省に対して、イギリスに身を置くからこそ言える、日本の研究環境改善についての助言をしてきた。例として、2006年の会議で提案され、その後実現された事業を挙げたのが表1である。

2010年にはJSPSロンドンによるシンポジウム・スキームが始まった。これは、JBUKのPIに対して、日英研究交流のためのシンポジウムの企画を公募し、その経費支援を行うものである。現在までに、JBUKのPIが企画するシンポジウムを12件支援し、2016年度も3件の支援を予定している。このスキームでは、日本からスピーカーを招へいする経費支援を行うことで、イギリス各地の大学において日本の最先端の研究を紹介するとともに、イギリスの学生や研究者が日本からのスピーカーと交

流する機会を提供している。実際に、シンポジウム後に共同研究が発展し、国際共著論文として結実したものや、JSPSのCore to Coreプログラムに採択されたものもあり、日英研究交流を支えるスキームとして定着してきたと言える。

2011年からはJBUKの活動は量的にも拡大期を迎えた。PIに限らず、PhDの学生やポスドクといった若手の在英日本人研究者にも広く参加を呼びかけ、参加者同士の交流を目的としたイベントを開催してきた。サバティカル等でイギリスに滞在している日本人研究者の参加も増え、2011年には126人だったJBUK会員数は今では3倍の380人となり、JBUKは存在感のあるネットワークに成長してきた。

### JBUKにはどのような研究者が参加しているのか

2016年3月現在のJBUK参加者の内訳を見てみよう。専門分野別(図1)では、生物系と医学系で半数近くを占める。これは以前から同様の傾向であるが、最近の特徴としては、人文学系、社会科学系が増えてきた。大学・研究機関別(表2)では、オックスブリッジやロンドンの有名大学が多いものの、大学の多様性にも目を見張るものがあり、全国各地の大学で活

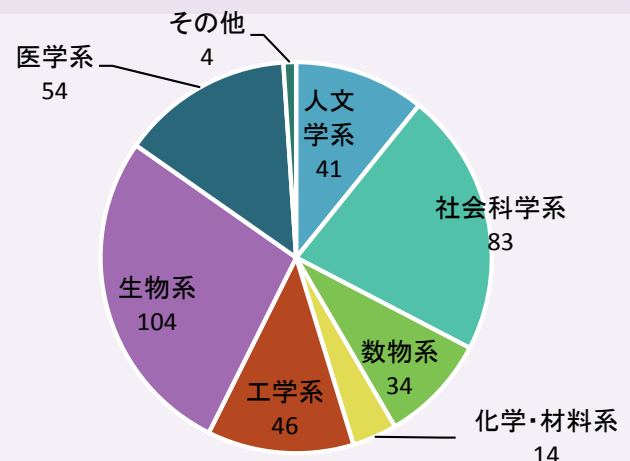


図1: JBUK参加者の専門分野(単位:人)

提案された意見	その後、実現された事業
日本の学生の海外派遣	2009年に組織的な若手研究者等海外派遣プログラムとして実現
若手研究者の表彰	2010年に育志賞として実現
科研費の執行の年度しばりの弾力化	2011年に科研費基金化として実現

表1: 2006年の第1回JBUK会議で提案され、実現された事業



## 「在英日本人研究者ネットワーク(JBUK)の紹介」

躍するJBUKの姿を想像できる。また、ポジション別の内訳(図2)を見ると、PIとして研究室を主催するLecturer以上の人数は2011年の47人から2016年の88人へと増加している。これに続くResearch Fellowは、ProfessorやLecturer相当のPIもいれば、PIの一手手前というポストドクも含まれるため、一概には言えないが、やはり増加している。また、若手研究者(Research Associate等、ポストドク、学生)とVisiting Researcher等も大きく

増加し、JBUK参加者増加の原動力となっている。

このように、JBUKはPI、若手研究者、Visiting Researcherという大きく3つのカテゴリーに分けることができるわけだが、それぞれ、在英の目的や期間が異なるため、ニーズも異なるだろう。JSPSロンドンとしては、今後、JBUKの潜在力を最大限に活かすためには、それぞれに応じた適切なサポートを提供する必要があると考えている。

大学・研究機関	人	大学・研究機関	人
University College London	59	Cranfield University	2
Imperial College London	33	Swansea University	2
University of Oxford	31	The Francis Cricke Institute	2
University of Cambridge	24	University of Edinburgh	2
King's College London	19	University of Essex	2
SOAS, University of London	15	University of Liverpool	2
Loughborough University	8	University of London	2
MRC	8	University of Nottingham	2
Queen Mary, University of London	8	University of Portsmouth	2
University of Manchester	8	University of St Andrews	2
University of Leicester	7	University of Stirling	2
University of Southampton	7	University of Westminster	2
University of Sussex	7	Aston University	1
University of Warwick	7	British Library	1
University of Bristol	6	British Museum	1
University of Reading	6	Brunel University	1
University of Sheffield	6	Canterbury Christ Church University	1
University of Glasgow	5	City University London	1
Cancer Research UK	4	Keele University	1
London School of Economics and Political Science	4	Kent University	1
London School of Hygiene and Tropical Medicine	4	Kingston University London	1
Newcastle University	4	Lancaster University	1
University of Bath	4	NERC	1
University of Birmingham	4	Oxford Brookes University	1
University of East Anglia	4	Royal College of Music	1
University of Leeds	4	Royal Holloway, University of London	1
University of York	4	STFC	1
企業	4	University of Aberdeen	1
Birkbeck, University of London	3	University of East London	1
Cardiff University	3	University of Hertfordshire	1
Goldsmiths, University of London	3	University of Strathclyde	1
University of Dundee	3	その他	18
University of Exeter	3		

表2: JBUK参加者の大学・研究機関

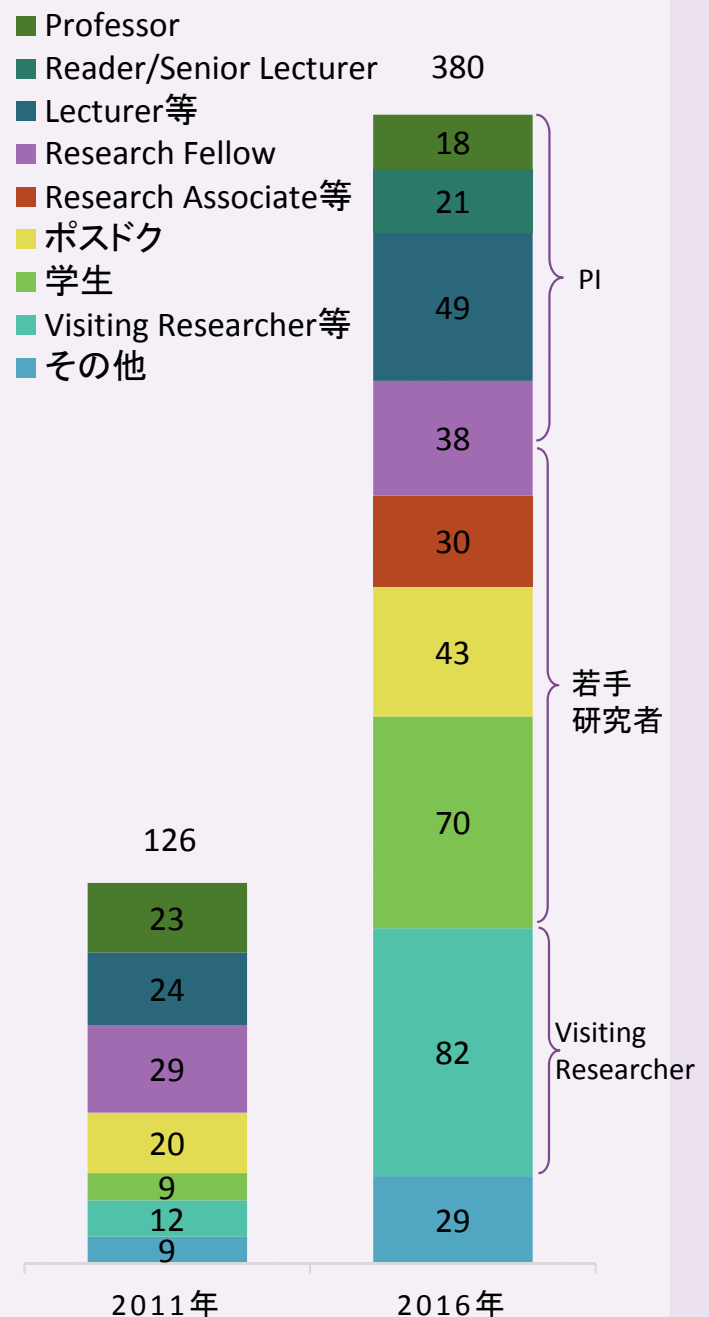


図2: JBUK参加者のポジション別内訳の変化(単位: 人)

## 「在英日本人研究者ネットワーク(JBUK)の紹介」

### これからのJBUK

#### ～PI、若手研究者、Visiting Researcherそれぞれに～

JBUKのうち、特にPIは、日英交流の長期的柱となる人材である。彼らに対しては従来からシンポジウム・スキームによるサポートを実施してきたが、2016年度から新たにJBUK Japan Awardも開始した。これは、日本へ短期渡航するための旅費支援であり、長期的で日英双方にメリットがある日英研究交流につながる渡航を支援する。ここでいう日英研究交流には、共同研究だけでなく若手研究者の相互派遣等、様々な形態がありうるだろう。また、JBUKのPIは、日本の学生にとっては、国際的に活躍するキャリア・パスの成功例でもある。日本の学生や研究者にとっても、JBUKのPIとの交流が刺激となることを期待している。2016年度は5月初旬に公募を締め切ったところであり、審査を経て、意欲的な申請2件を採用する予定である。

JBUKの2番目のカテゴリーである若手研究者は、長くても数年で今のポジションから異動することが想定される層である。次は日本に帰国するかもしれないし、イギリスでPIになるかもしれない、あるいは日本でもイギリスでもない他の国に活躍

の場を求めるかもしれない。彼らにとって必要なのは、できるだけ早くイギリスの研究環境に慣れて研究成果を上げ、その研究成果を持って次のポストに移る、そのためのサポートであろう。JSPSロンドンとしては、役立つ情報をタイミングよく提供できるよう、企画を練っているところである。

JBUKの3番目のカテゴリーであるVisiting Researcherは、日本の大学に所属する常勤研究者が、数ヶ月から1年程度、サバティカル等でイギリスに来て研究に専念している、というものである。在英期間が短いため、従来はあまり顧みられてこなかった存在であるが、彼らは日英交流の日本側の柱となる人材であり、その価値は実は大きいのではないか。在英中に築いたイギリス側とのネットワークを日本に戻ってからでも維持・発展させるためのサポートが必要であろう。そのひとつとして、イギリス側の優れた研究者を日本に受け入れるために、JSPSのフェローシップ(外国人特別研究員や外国人招へい研究者の制度)を活用していただきたい。また、Visiting Researcherが在英中に特別講義等のイベントを行う場合には、JSPSロンドンが後援し、その機会にJSPSのフェローシップについてイギリス側研究者に周知するなど、JSPSロンドンがVisiting Researcherの活動と連携していくことも重要だと考えている。

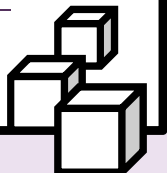
### 第11回JBUK会議が開催されました

2016年2月3日、ロンドンのDaiwa Foundation Japan Houseにて第11回JBUK会議が開催されました。今回は、JBUKのうちPIの研究者を対象として、参加者間のネットワーキングに加えて、イギリスの大学のPIとして問題意識を共有し、今後のJBUKの活動について議論しました。また、今後のJBUKのプレゼンスを高めるためにロゴマークの選考も行いました。



多くのPIが抱える最大の悩みは、研究費獲得の厳しさです。また、日本からポstdokを受け入れる際のベンチ・フィー(※)の問題も研究現場に影を落としているようです。これらの問題はイギリスの大学経営の根本に起因するものでもあります。一方で、このようなJBUKのつながりを通して、先輩PIの経験と知恵に触れることが励みとなる部分もあり、会議後のパブでの懇親会も大いに盛り上がりました。

※ベンチ・フィー:ポstdokや大学院生等がイギリスの大学等研究機関で研究する際に、受入大学に支払う施設利用料のようなもの。受入期間、大学、学部、受入教員や事務局担当者の裁量等によって金額は様々で、徴収されない場合もあるが、年間100万円を超える場合もある。



# 在英日本人研究者ネットワーク(JBUK)に入りませんか？

JSPS(日本学術振興会)ロンドン研究連絡センターでは、在英日本人研究者のネットワーク作りと研究活動支援を行っています。



JBUK(在英日本人研究者会)は2006年から始まった「在英の日本人研究者の緩やかなネットワーク」で、約380人のメンバーがいます(2016年3月現在)。

メンバーは、イギリスで研究しているPhDの学生やポスドク、サバティカル中の研究者、イギリスの大学のLecturerやProfessorまで、様々なキャリアの、多様な専門分野の日本人研究者です。

## メンバーの特典

- ① JSPSロンドンからイベント情報等、様々な情報をメールでご案内します。
- ② メンバー間でのご自身の情報開示にご同意いただける場合には、他のメンバーの情報を閲覧できます。専門分野が近いメンバーを探すことができます。
- ③ メンバー限定のイベントにご招待します。
- ④ メンバーを対象とした助成プログラムがあります。

入会は簡単！  
JSPSロンドンのWebsiteから登録するだけ！

ここをクリック <http://www.jsps.org>



日本学術振興会ロンドン研究連絡センター  
14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, UK  
Tel: +44 (0)20 7255 4660 Fax: +44 (0)20 7255 4669  
E-mail : [enquire@jps.org](mailto:enquire@jps.org) <http://www.jsps.org>



## センター長のつぶやき⑦ 「ロンドン奮戦記(2)」



ロンドン研究連絡センター長  
竹安 邦夫

1年ぶりのロンドン奮戦記です。早いものでJSPSロンドン海外研究連絡センター(JSPS London)に赴任して2年が経過し、私の任期が終わります。この間の皆様方からのご支援・ご協力に感謝いたします。

2年たっても、やはり身にしみて感じるのは「英語は難しい」「英国文化には深いものがある」という、当たり前のことです。まず、中学生から55年もやっているのに英語の発音には苦労します。1つの単語のなかに「r」と「l」が混じっていると、未だにダメです。必ず聞き返されます。これには毎日ガックリさせられます。米語に慣れ親しんだ者にとっては、ロンドンに来て初めて聞く(見る)日常単語・フレーズが多いことにも自信を失います。言えれば限りありません。

キリスト教に基づく英国文化にも驚きます。12月25日は終日、電車、バス、地下鉄は全面ストップ、スーパーマーケット、レストランも休業です。こんな大都市で、です。ウェストミンスター寺院を見学するには17ポンドほど取られます。しかし、夕方の礼拝に参加するのは無料です。パブでの人々の振舞いも面白い。その他多くの興味深い経験をさせていただきました。

\*\*\*\*\*

最近ここ数年の英国の研究費配分方式の偏りには驚かされます。特に自然科学分野の研究費配分は、全くもって「出口志向」で、「数年以内に社会に役立つ成果」の出そうにない研究計画はサポートされません。英国トップの研究型大学の研究者で、基礎研究に打ち込んできた教授達には「身の置き所」が無くなってきています。このような状況のなかで、全ての公立大学への補助金(日本で言う「運営費交付金」)が日本の状況

以上に極端に削減され続けています。

しかし、英国政府は、大学の研究者達(運営者も含む)には、大学運営に関して細々とした指図はしていないのが現状です。従って、大学の研究者達は自分の哲学に基づいて、結構「大学の自治」を守っているように見受けられます。彼らは、日本の基礎研究者以上に「教育・研究の自由」を楽しんでいると思います。一方、「日本ではどうか」ということについて、基礎研究を支えるJSPSの長年の受益者として、さらにJSPS海外研究連絡ロンドンセンター長として、確信したことがあります。それは、現場(私の場合は教育・研究現場)に教育・研究の経験のない官僚があれこれ指図する時代になった、ということです。今や日本の大学教員は官僚に操られ、右往左往しています。「お金」を餌にして。こういったシステムの弊害はいたるところにあります。

プロ野球界。無知なフロントが現場に口を出すと、チームは崩壊、優勝など全く手の届かないところに行ってしまう。スポーツの解説者だって、経験者が語るからこそ説得力があります。音楽界をみてみますと、楽器を弾けない指揮者なんて見たこともありません。素晴らしい演奏者しかオーケストラで良い音楽を生み出すことは出来ません。例を挙げればきりがありません。教育界。現場から遠く離れたいわゆる「識者」が現場に口を出す。これまでに、上手く行ったことはなく、現場の混乱をまねいています。このような状況での大学改革の道には厳しいものがあると思われます。大学教育関係、研究関係。教育・研究経験のない者がどうして現場の在り方を指導できるのでしょうか。

一般的にも、こういった状況に最も適格な答えがあります。質素な暮らしぶりから、「世界で一番貧しい大統領」として注目

を集めた南米ウルグアイのホセ・ムヒカ前大統領が、朝日新聞の記者インタビューに、こう答えています(朝日新聞: 2016年3月31日)。「もちろん国家は必要だよ。だけど、危ない。あらゆるところに官僚が手を突っ込んでくるから。彼らは失うものが何もない。リスクも冒さない。なのに、いつも決定権を握っている。だから国民は、国家というパパに何でも指図されていてはいけない。自治の力を身につけていかないと。」そう、責任を取らない者が企画を立て、現場を指図する構図が出来上がってしまっているのです。

もちろん大学自体の荒廃、科学界の倫理破たん、いろいろと別の観点からの問題はあります。しかし、先端教育・研究の発展を目指すなら、独創性豊かな教育・研究者が自覚し、実践行動の自由度を自ら確保していかなければならないでしょう。40数年前、かつて私が学生であったころは、教育・研究における倫理感とは教育・研究の実践を通して、教授から直接たたきこまれたものでした。今では、それらについて講義をせよ、という時代になりました。いや、教授自身がデータの改ざん、ねつ造をする時代になりました。CNS(Cell, Nature, Scienceという雑誌)に論文を出せば研究費があたる、出さなければあたらぬ、という風潮がアジアでは、特に日本、韓国、台湾等では強いことが研究者の倫理喪失を招く大きな原因ではないか、と思います。英国ではこういった風潮はあまり見受けられません。きちっとした論文を書けばよい、と思っている研究者が多い。(もちろん古今東西、研究不正は何処の国にもあります。)

英国の自由な研究者には、研究費が少なくても「自分なりの研究」を推進する心意気をもっている人が多々います。論議が好きで、共同研究が上手い、といった点に感心させられます。我が国にはJSPSがあります。JSPSの基本は「研究の独自性」にあると思います。また、海外研究連絡センターの中心的役目は「海外共同研究の推進」にあります。JSPSの職員の日夜の努力のもとに、我々基礎研究者の生きていく道が確保されていることに大なる感謝の念を持って、ロンドンを去りたいと思う次第です。

\*\*\*\*\*

昨年No.46からJSPS Londonニュースレターの体裁を縦型に変更しました。また、印刷した場合のページの向きも全て横開きで「縦」になるようにしました。日本人だけでなく英語圏の人たちにも興味をもっていただけるように、内容的には、日本語記事(在英研究者の者窓から、センター長のつぶやき、ぼりーさんの玉手箱等)だけでなく、英語記事(シンポジウム報告、フェローシップ公募、同窓会メンバーからの寄稿等)も充実させました。楽しんでいただけますと幸いです。

2014年度から2015年度にかけて、JSPS Londonが主催する日英共同シンポジウムのあり方の再検討、英国の学術振興機関との合同シンポジウムの開催、在英日本人研究者(特に若手の研究室主宰者)の支援体制の確立、等に力を注ぎました。現在は「種を蒔いた」というところでしょうか。収穫は2016年度以降ということで。

日英共同シンポジウムでは、若手研究者からの提案も重視し、彼らにシンポジウムをオーガナイズする経験を積んでいただきたいと思っています。英国の学術振興機関との合同シンポジウムでは、2015年度はBritish Academyと共催シンポジウムを開催し、2016年度はRoyal Society of Chemistryと日本化学会との共催でシンポジウムを開催します。英国人研究者と日本人研究者との密な交流を期待しています。在英日本人研究者には、日本への情報発信および共同研究の推進をサポートしたいと思っています。

日常業務の一環として、この2年間に50校ちかい英国内の大学で事業説明会を行いました(図1)。驚くべきことは、(1)ほとんどの大学で、日本人研究者(Lecturer以上)が頑張っておられること、(2)JSPSを知らない英国人研究者が結構多い、ということです。

在英日本人研究者ネットワーク作りには、英国の各大学での研究室主宰者を把握することが重要です。また、JSPS Fellowship Programの質的向上のためには、より多くの英国人研究者にJSPSを知ってもらい、フェローシップに応募していただきたいと願っています。そのためには、今後も事業説明会が重要な役割を果たしていくことでしょう。

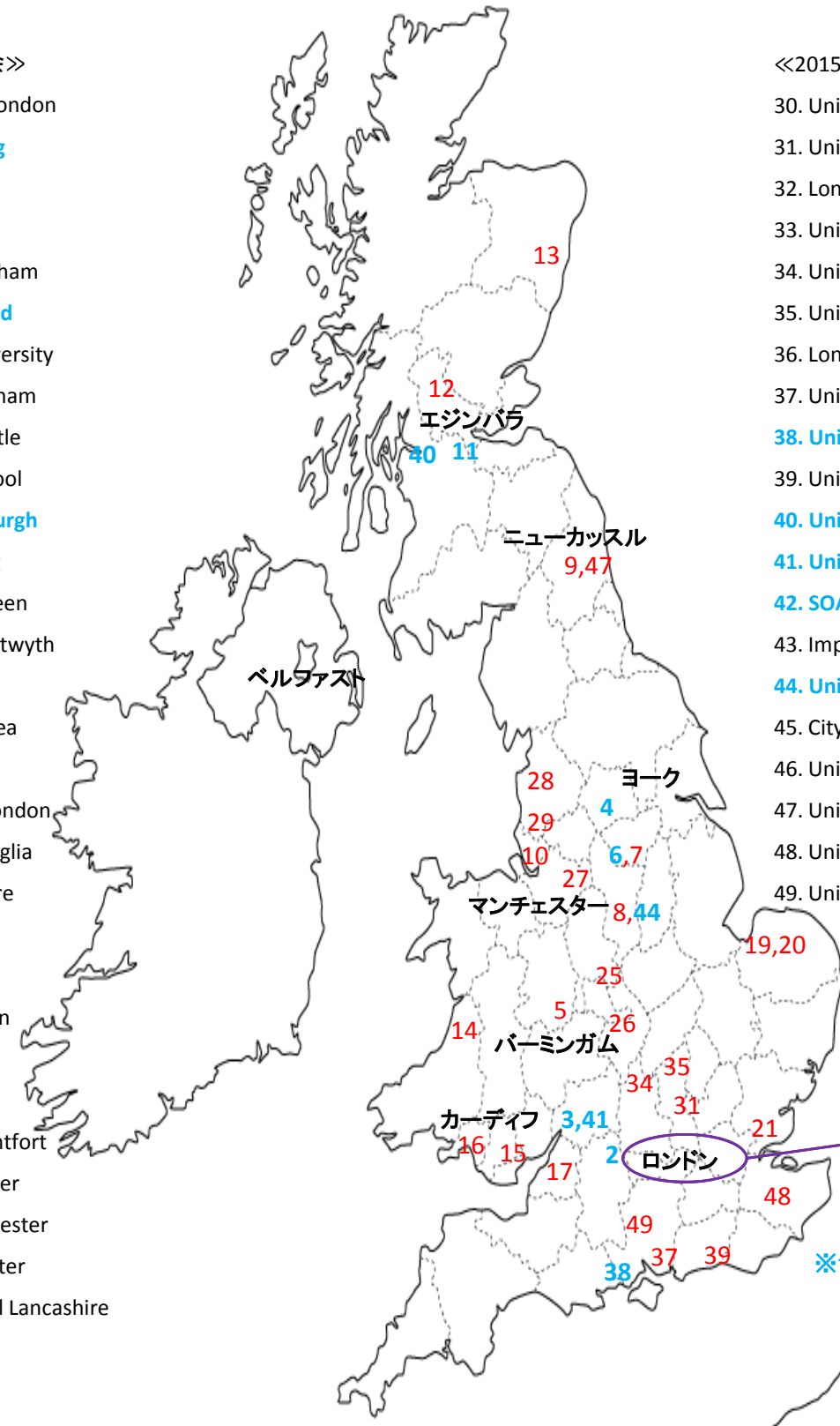
図1 事業説明会で訪問した英国大学一覧  
(2014年4月～2016年3月)

≪2014年度事業説明会≫

1. Regent's University London
2. University of Reading
3. University of Oxford
4. University of Leeds
5. University of Birmingham
6. University of Sheffield
7. Sheffield Hallam University
8. University of Nottingham
9. University of Newcastle
10. University of Liverpool
11. University of Edinburgh
12. University of Stirling
13. University of Aberdeen
14. University of Aberystwyth
15. University of Cardiff
16. University of Swansea
17. University of Bath
18. University College London
19. University of East Anglia
20. The John Innes Centre
21. University of Essex
22. University of Brunel
23. Kings College London
24. Royal Holloway, University of London
25. University of Demontfort
26. University of Leicester
27. University of Manchester
28. University of Lancaster
29. University of Central Lancashire

≪2015年度事業説明会≫

30. University of Roehampton
31. University of Hertfordshire
32. London South Bank University
33. University of Greenwich
34. University of Buckingham
35. University of Bedfordshire
36. London School of Economics
37. University of Portsmouth
38. University of Southampton
39. University of Sussex
40. University of Strathclyde
41. University of Oxford
42. SOAS, University of London
43. Imperial College London
44. University of Nottingham
45. City University London
46. University College London
47. University of Newcastle
48. University of Kent
49. University of Surrey



1,18,22,23,24,  
30,32,33,36,42,43,  
45,46

※青字: シンポジウム開催地



## 体験レポート

# 「イギリス大学院留学生生活と学術支援における研究者交流の重要性」

JSPS人材育成事業部研究者養成課・清水 蘭  
(海外研修中)

### ○自己紹介

私はJSPSの職員になってから6年ほど経つが、現在、海外語学研修の一環としてUniversity College London(UCL)の大学院修士課程にてScience, Technology Studies(STS)を学んでいる。STSの定訳はなく日本ではあまり馴染みがない分野だが、一般的に「科学技術社会論」「科学技術論」「科学論」などと呼ばれる。科学と技術を歴史的、倫理的、社会的な観点から分析し、科学と技術が社会、政治、文化にどのような影響を及ぼしているのか、社会に恩恵をもたらす科学・技術であるためには、どのように科学・技術が発展していくべきかを探求する学問である。科学の歴史や哲学、政策から科学コミュニケーションまで扱う範囲は非常に幅広く、分野横断的である。STSは科学や技術と社会の相互作用を深く理解するうえで大変有用で、今後、私が JSPSで学術全般を支援する事業に携わっていくにあたり有意義だと感じている。

本稿前半では、私が大学院の授業で学んでいることの一例として、科学と呼ばれる営みが必ずしも絶対的な真理とはいいがたく研究者間の人間関係などの社会的な側面に左右されることを紹介する。また、本稿後半では私の大学院生活についても触れたいと思う。

### ○科学とは

「科学」とは何だろう。なぜ星占いは科学ではなく天文学は科学と考えられているのだろうか。星占いは論理性、体系的、普遍性が低く、データの再現性、客観性が低いので疑似科学である。一方、天文学は客観的にいつも正しい真理であるといったところだろうか。そう、科学、特に自然科学は一般的に誰がどうしてもいつなんどきもそうであるという真理を探し求める行為であり、科学の知識とは絶対的なものであり、絶対的なものであるべきだと多くの人は考えるだろう。もちろん、天動説のように、かつては正しいとされたことが後に間違いとされるように科学は上書きされることもあるが、しかし、一般的には科学の知識は、誰がやったとしても変わらない普遍的な真実である。



指導教員Dr Carina Fearnleyと。(著者:左)

特に物理学において実験はその科学知識を得る確実な方法と考えられている。果たして、それは本当だろうか。20世紀に行われた重力波の測定実験を通して考えてみよう。

重力波とは、アインシュタインが1916年に発表した一般相対性理論の中で、時空のゆがみが伝播する波動現象として予想したものである。ただし、アインシュタイン自身は、この重力波の影響はあまりに小さく観測はきわめて難しいであろうと考えていた。2016年2月、アメリカの研究チームが重力波を観測することに成功したと発表した。また、日本もKAGURAという重力波検出装置を建設中であり2017年に本格観測開始を予定している。

この重力波を半世紀前に測定しようとした人がいる。アメリカのメリーランド大学のウェーバーは、重力波をとらえる装置として共振型重力波検出器(通称、ウェーバーバー)を考案した。重力波が、金属でできた棒状のものを共振させることで、重力波を測定しようとしたのだ。度重なる実験の結果、1968年にウェーバーは重力波を検出したと発表した。しかし、他の研究者による再現実験は全て失敗し、1975年ごろまでには学界ではウェーバーの実験自体に問題があるという共通認識にいたった。この論争では、実験装置の正確さについて疑問が呈された。重力波は、その有無も詳細な性質も不明である。未知のものを検出しようとする実験の場合、正しい実験結果を事前

に決められない。そのため、結果に疑問があれば、よりよい検出装置を作ることになるが、正しい結果がわからないため、何が「よりよい」装置なのかがわからない。よって、こうした議論は、どこまでいっても結論が出ないのである。この現象を「実験者の無限背進 experimenters regress」と呼ぶ。ではどのように、ウェーバーの実験方法は間違っていたという論争の決着はついたのだろうか。

当時イギリスのバス大学に所属していたコリンズは実際に研究が行われた現場に足を踏み入れ、研究者たちに話を聞いて、何をもってしてお互いの実験を信用するのか調査した。すると、多分に「非科学的」な要素が判断の中に含まれていることがわかった。例えば、実験者の能力や出身大学、正直さや、学界での立位置などが重要な判断要素となっていたのである。ウェーバーの話は、絶対的な真実のように見える科学の営みは、実際はとても人間的で非科学的な行為によって作り出されているということを示唆している。科学が社会的事象や宗教的信念と異なる普遍的で確実明確な真理であるという一般的な見方は必ずしも正しくなく、科学もまた社会的に構築されてきたものなのだ(※1)。

ここからJSPSの役割に目を移せば、それが単に研究活動や活動の成果だけを支援することに止まらないことが分かると思う。つまり、JSPSに求められる学術支援とは、科学を社会的な活動としても捉え、その活動全般に関り、支えていくことではないか。それには、研究者社会を一段と発展させるために研究者間の交流を促進することなども含まれるだろう。UCLで得た科学とは何かという問いに対する答えは、単なる知識という枠を超えて、私が今後JSPSで担っていく事柄にも通じていくのだ。

## ○大学院生活

私がこのようなことを学んでいるUCLといえば、例年各種世界大学ランキングの上位に位置し、研究も教育もトップレベルとされている。しかしながら、この半年ほどの学生生活を通して

問題点も多々抱えているように感じている。

一つには慢性的な教室不足だ。UCLの学部と大学院の学生総数はこの10年間で約2倍に増加した(※2)。学生数は趨勢的に増加してきたが、2015年のイングランドの大学定員枠撤廃が増加傾向に拍車をかけたと思われる。教室不足は深刻で、一つの授業を毎週違う場所と時間で行うことは珍しくなく、酷いときには空き教室がないことで授業が休講になる。大学が周辺ビルを借りて授業を行うこともあり、JSPSロンドンの事務所が入っているビル(UCLの敷地ではない)もその一つだ。また、図書館の机など自習スペースも少なく、絶えず全席が埋まっていて床に座って勉強している生徒も大勢いる。施設面で大学の質が保たれているかと問われると疑問がある状況である。

次に、授業に参加する学生の質についても指摘しておきたい。授業自体は相応に高い水準を要求していると感じている。他のイギリスの大学院と同様に、授業の事前準備として多くの場合数本の論文を読むことが求められるほか、授業は参加型であり往々にして生徒は発言を求められる。しかし、こうした授業



キャンパス

※1: 伊勢田哲治. (2001). 科学的合理性と二つの「社会」概念. 情報文化研究, (14), 27-42.  
KAGRA. 重力波研究の歴史. <http://gwcenter.icrr.u-tokyo.ac.jp/plan/history> (参照2016-04-28)  
Sismondo, S. (2011). An introduction to science and technology studies. John Wiley & Sons.  
※2: Student Statistics. <https://www.ucl.ac.uk/srs/statistics> (参照2016-05-24)



スタイルに関わらず、学生の中で授業の準備をしてくる人が多数派ということではなく、全く予習をしてこない人もいれば、全く発言をしない人もいる。全員が勉強一筋というわけではないようだ。

上記の点に関して言えば、UCLが日本の大学に比べて特段優れているという印象はないが、両者の圧倒的な違いは人の多様性だろう。イギリスの大学には年齢・人種・国籍などの外的違いや思考・価値観といった内的違いの多様性が一般的な日本の大学より高い。多様な人が集まり交流することによって新しい知が生まれる可能性が高まり、大学の競争力を底上げしている。イギリスの多様性は、英語が世界の共通語としての地位を確立していることで人が集まりやすいことだけでなく、それに加え何事も議論するという文化が多様な人々の交流を促進しているように見える。研究者間の交流は知の創造のみならず、研究者コミュニティ内の地位確立にもつながるだろう。科学者としての評価は純粋なる研究活動にのみ成り立つのではなく、研究者同士の交流や力関係に左右される傾向がある。その点、日本の科学界は「科学的」なレベルは高いが、多様な人々と議論を通じて科学コミュニティ内で力をつけるという面では劣っているのかもしれない。日本の学術をより発展させるには、多様性の確保のために研究者交流の促進が不可欠に感じた。

単調になりがちな大学院生活で、一番楽しんでいるのは寮生活だ。私が今住んでいるUCLの学生寮は300名ほどの大規

模なもので、住人たちは多種多様だ。ここには、様々な国と地域出身の異なる専攻分野を学ぶ学部生、大学院生がいる。平日の朝食と夕食は提供され、この食事の時間が勉強漬けの毎日の数少ない楽しみである。食堂で年齢も文化も専攻分野も違う人たちと、他愛もない会話をするのが楽しい。残念ながら食事はお世辞にもおいしいとは言えず(どう調理をしたら、まづくなるの!)、栄養についてあまり考慮されているとは思えない(イギリスの食育はどうなっているの!)。それでも、毎日、寮の友人たちと食事の文句を言うのがまた楽しいのも事実である。大学院を卒業した後も世界中に友達がいるという状況はうれしい。寮の施設は古く、設備の不良は日常茶飯事で、この点に関する不満は強い。また、衛生に関する概念や、他者と共同生活をするという感覚が、人によって違うということを強く学んだ。こうした感覚の違いは、最終的には自分の中で折り合いをつけるしかない。しかし、日々勉学に励みつつ、いろいろと慣れない生活を不満に思うこともありながらも、替え難い貴重な経験をさせてもらっていることに感謝したい。

本稿では、イギリスの大学院で学んでいる内容と大学院生活の実情とについて紹介した。科学は「科学的」な面のみならず、研究者同士の交流などといった「非科学的」な面からも成り立っているということ。それは決して悪いことではなく、だからこそ学術の支援には研究者交流の促進という視点も取り入れるべきであろうということが伝われば幸いです。



寮の外観



→寮の食堂



図書館



## | Recent Activities

### Japan Day at University College London Ever considered studying in Japan?

University College London  
2016年2月5日（金）

University College London (UCL) 眼科学研究所の大沼信一教授の呼びかけで、同大学でJapan Dayが開催されました。大沼教授は在英日本人研究者会(JBUK)メンバーとして日英交流に尽力されています。



同イベント主催者大沼教授によるプレゼン

同イベントは、「日本への留学や日本での研究に興味がある学生に対して、各団体が持っている渡日のためのプログラムを紹介し、次のステップに進んでほしい」という大沼教授の思いから実現したものであり、趣旨に賛同した在英日本国大使館、国際交流基金、大和日英基金、グレートブリテン・ササカワ財団、JSPSロンドンが“Japan Day”と称して、UCLの学部生から博士課程の学生に対して、事業説明会を開催した。

参加者は各団体の説明を聞き比べることで、それぞれのプログラムの特徴をより深く理解しているように見受けられた。

また、今回の目玉として、各団体のフェローシップの過去事業

経験者による体験談も披露された。彼らの話で興味深かったのは、各プログラムを通じて日本で培った経験が英国での就職に活かされているということである。

また、事業説明会と平行して別会場に設けられた各団体の事業紹介ブースでは、興味を持った学生が続々と立ち寄り、担当者に熱心に質問を投げかけていた。

JSPSロンドンとしては、我々単独のプロモーション活動だけではなく、今回のような「オールジャパン」のプロモーション活動も積極的に支援することで、より一層英国と日本の研究のコラボレーションを促進していきたい。



JSPSロンドンの事業紹介



事業説明会と平行して設けられたブース

## | Recent Activities

立命館大学・在英日本大使館共催公開レクチャー  
(JSPSロンドン後援)

UK-Japan Collaboration Public Lecture:  
The Past and Future Earth  
- Climate change and co-existing sustainably  
with nature

在英日本大使館  
2016年3月4日(金)

立命館大学が在英日本大使館と共催で日英研究者による公開レクチャーを実施しました。日英の共同研究促進を見据えた公開レクチャーの様子を立命館大学広報課と英国事務所にご報告いただきました。

立命館大学はSGU(スーパーグローバル大学創成支援)の取組みとして、立命館英国事務所を通じ在英日本大使館にて公開レクチャーを企画、3月4日に“UK-Japan Collaboration Public Lecture: The Past and Future Earth - Climate change and co-existing sustainably with nature”(共催・在英日本大使館、後援 JSPS、JETRO、JCCI)を実施し、林景一・日本国特命全権大使をはじめとする日英の関係者など75名が参加しました。

グローバルな課題として注目度も高い「気候変動」「持続可能な社会」をテーマとして、講師には、立命館大学の中川毅・教授(総合科学技術研究機構・古気候学研究センター長)、森裕之・教授(政策科学研究科長)に加え、英国からEric Wolff・



冒頭で挨拶する吉田美喜夫学長

教授(University of Cambridge)、Robert Lowe・教授(University College London)をゲストスピーカーとして招聘し、講演を行いました。

セッション1では気候変動をテーマとして中川教授から、「歴史の標準時」として世界で採用されている、福井県水月湖で採取した「年縞(ねんこう)」の研究成果について、Wolff教授は南極で氷床コアを採取する様子と、氷床コア内のCO2量の分析についての研究を紹介し、広く「気候変動」に関する再認識を促す講演を行いました。

続くセッション2では、持続可能な社会をテーマとして環境・エネルギーの分野から、それを実現するための課題や提起がなされました。森教授は現代社会最大の産業災害である「アスベスト」問題について、阪神淡路大震災や東日本大震災の事例をもとに発表し、Lowe教授は、建造物の構造によるエネルギー効率の研究について紹介しました。

講演後には活発な質疑応答が行われ、その後のレセプションにおいても引き続き、日英の研究者を中心に意見交換がなされました。

冒頭の挨拶で、立命館大学吉田美喜夫学長は、「立命館大学は特色あるグローバル研究大学として教育・研究の水準を高めてきた。本講演を通じ、日英のさらなる協力関係が構築され、研究を通じた連携につながることを期待している」と述べました。



講演する中川教授

## | Recent Activities

立命館大学では、今後もこのような講演やシンポジウムの実施と共に、英国研究機関との共同研究の促進に向けた基盤整備を行っていく予定です。

最後に、多大なるご尽力を頂いた在英国日本大使館の皆さま、後援して下さった方々、そして参加者の全員に厚くお礼を申し上げます。

プログラムはこちら：

<http://www.jsps.org/news/2016/02/uk-japan-collaboration-public-lecture-the-past-and-future-earth---climate-change-and-co-existing-sustainably-with-nature.html>



講演する森教授



質疑応答の一幕



左から、中川教授、森教授、林景一・在英国日本国特命全権大使、吉田学長、Wolff教授、Lowe教授



会場の様子

### 立命館英国事務所

2010年7月1日設立。事務所はロンドン大学SOAS(School of African & Oriental Studies)内にある。日英研究コラボレーションの橋渡しやシンポジウムのコーディネート、欧州からの留学生リクルート、校友会の運営、及び独自の「立命館セミナー・シリーズ」の主催等をしている。次回の立命館セミナー(無料・要予約)は6月下旬に実施予定。

連絡先: js-a@st.ritsumei.ac.jp (Junko Sakamoto)



## | Recent Activities

Choshu-Londonシンポジウム  
(山口大学・UCL共催、JSPSロンドン後援)

### The 9<sup>th</sup> Choshu-London Symposium

Department of Chemistry, UCL  
2016年3月16日(水)-17日(木)

山口大学とUCLのジョイント学術シンポジウムであるChoshu-Londonシンポジウムが開催されました。今回は9回目のシンポジウムとなります。企画から講演まで携わった上村明男教授(山口大学・大学院創成科学研究科・化学系専攻)に今回のシンポジウムをレポートいただきました。

第9回のChoshu-LondonシンポジウムがUniversity College London (UCL)の化学科で開催されました。これは山口大学とUCLが、約150年前の初代の日本人留学生である長州ファイブ(井上聞多(馨)、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤俊輔(博文)、野村弥吉(井上勝))の偉業を記念して、交互に開催しているものです。奇しくも長州ファイブのうち3名の面倒を見たAlexander Williamson教授の所属していた化学科同士の交流を中心にこれまで進められてきました。UCL化学科は、希ガスの発見によりノーベル賞を受賞したRamsay博士や、天然物アルカロイド研究で著名なノーベル賞学者のRobinson教授を輩出した化学系の拠点大学の一つです。今回の講演会ではJSPSロンドンからも後援をいただきました。

講演会は最初にUCL化学科から長州ファイブとUCLの深いつながりを示す文物についての短い紹介があった後、UCL、山口大学双方の研究者それぞれ4名の学術講演により行われました。無機化学から有機化学まで、化学の幅広い分野の研究結果の発表があり、それぞれの発表のあとにはエキサイティングな議論が行われました。これまでのシンポジウムとあわせて、日英双方の化学者の研究者交流にも深みを増すことができたものと思います。シンポジウムの合間の休憩時間や終了後のディナータイムにも活発な議論が続けられました。

講演会はUCLの学期中であったこともあり、UCL化学科を中心とした異なるいくつかの会場で分散して開催されました。のべにして150名程度の参加がありました。また、講演の合間には



UCL化学科正面玄関奥に飾られている長州ファイブを記念する展示コーナー。日本国首相からの感謝状も掲げられています。



UCLと長州ファイブの深いつながりを示したUCL化学科Alwyn Davies 名誉教授



講演する今回のオーガナイザーでもあるUCL化学科Hugo Bronstein博士

## | Recent Activities

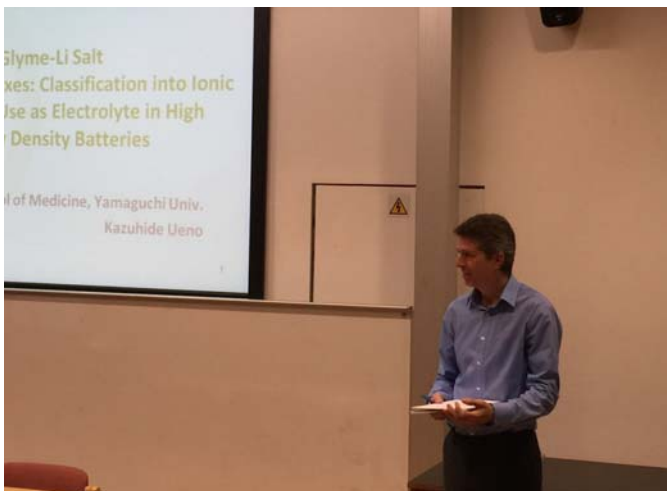
JSPSロンドンによる、イギリスから日本への大学院学生や若手研究者をサポートするフェローシップ制度の説明もあり、何人かのUCLの学生、院生などの興味を引いていました。この制度を活用して多数の英国の学生や若手研究者により日本に来ていただく契機になることが期待されます。

山口大学は150年前のこの偉大な「故事」をベースとしたUCLとの深い関係を元に、さらに国際的な共同研究への展開を進めていきたいと考えています。これまでに5名以上の山口大学の大学院学生が研究交流のために半年から1年間訪問しただけでなく、グローバル人材育成事業でも多数の山口大学学部学生が研修に訪れているUCL。今後の着実な国際交流を展開するためにも大変有意義なシンポジウムでした。次回は1-2年後をめぐりに山口大学でUCL研究者をお招きして開催する予定です。

今回の講演の開催にあたり、UCL化学科の研究スタッフの皆様方、JSPSロンドンの皆様方のご援助を賜りました。感謝申し上げます。



講演する山口大学・藤森宏高准教授



講演会の進行をする今回のオーガナイザーでもあるUCL化学科Jim Anderson教授



活発な議論は講演会後のディナータイムでも続けられました。

# 在英研究者の者窓から

## 第7回 レディング大学 林 叔克



研究室のメンバーとの写真(筆者:右端)

Dr Yoshikatsu Hayashi  
Lecturer, School of Systems Engineering (Biological Sciences from August 2016), University of Reading

### 略歴

- 1999年 東京大学農学部 応用生命科学課程 応用生物化学専修 (BSc)
- 2004年 Physical Chemistry, Center for Chemistry and Chemical Engineering, Lund University (Ph. D)
- 2005年 東北大学大学院理学研究科物理学専攻・東北学院大学教養学部人間情報学専攻 日本学術振興会特別研究員
- 2008年 東北工業大学 特定領域「移動知」 特別研究員
- 2010年 東京農工大学工学部 情報工学科 特任助教
- 2011年 立命館大学理工学部 ロボティクス学科 助教
- 2013年 Lecturer, School of Systems Engineering, University of Reading (現職)

### ホームページ:

<https://www.reading.ac.uk/sse/about/staff/y-hayashi.aspx>

Email: y.hayashi@reading.ac.uk

今回は日本からレディング大学に移り、PIとしてご活躍中の林叔克先生に、イギリスでPIをすることの魅力をご紹介いただきました。イギリスで研究したいと考えている日本の若手研究者にとって、役立つアドバイスが満載です。

現在、Reading大学 School of System Engineeringの System Neuroscience GroupでLecturerをしています。私の研究グループの分野はサイバネティクスで、物理的/工学的手法を用いて「いきもの」と「もの」の間を探るということをしています。8月からは、グループごとSchool of Biological Sciencesに移ります。

博士号は統計物理・ソフトマターの分野でとりましたが、その後いろいろな分野を渡り、今に至ります。これまでの共通した興味としては、生き物がどう環境に適応するか、環境にリアルタイムに反応しながらも、環境に先んじることができる予測メカニズムを解明する、という所にあります。研究グループでは、統計物理学を使ってDNA、細胞、個体のダイナミクスの解明、物理化学的な反応によるパターン形成と脳機能の関連や、社会認知機能の解明に向けて、二者間の協調動作中に脳波計測を行うことで、身体を介した2つの脳の機能的なつながりを明らかにしています。応用研究として、運動意図を脳波計測によって検出し、Wearable Soft moduleで上肢の運動をアシストするリハビリシステムを開発しています。最近では、脳活動の機能的な結合ネットワークのDynamicsを明らかにするための統計力学的な手

法も開発しています。ぜひ、一緒に研究したいという方がいましたら、一度ホームページをご覧くださいと嬉しいです。

2013年にReadingに来てから3年が経ちました。ようやくイギリス生活に慣れてきたように思います。研究室のマネージメントの大変さを感じつつも、研究の進展に嬉しさを感じる日々です。私がレディング大学に来て、まず驚いたのは、みんなが長期休暇をよくとることです。例えば、夏季休暇に4週間から6週間の休みを取るのが普通なようです。私も休暇中は車でイギリスの地方へ家族旅行をしています。一週間ほどコテージを借りて観光したり、近くのファームショップで買い物をしてご飯を作ったり、地元のパブに行ったりとその土地を楽しんでいます。私がイギリスっぽいと感じたのは、南海岸のジェラシックコーストの景色です。中生代の地層が残っている切り立った崖や、海辺の小さな町と昔からの景色が残っています。海岸では宝探しのようにアンモナイトの化石を見つけることができます。また、イギリスの田舎の料理は美味しいです。地産地消で新鮮な素材が丹念に料理されていて、お店の人も、料理とサービスに誇りをもって感じる感じが素敵です。



レディングでは比較的アジア食材を手に入れやすいので、家での食事は日本にいた時とあまり変わらないように思います。加えて、家では子供たちと仮面ライダーのDVDを見たり、日本語の本を読んだり、日本にいた時とあまり変わらずにいるので、休暇中に出かけると、どこでもドアで、海外旅行をしている気持ちになります。なので、実際のところ私がイギリスの生活に慣れてきたのかどうか怪しいのですが、以下に、教育・研究の両側面に関して、またイギリスでの現状に関して、自分が経験したことを書いていきたいと思います。

**教員ポストの採用に関して:** もともとレディング大学に共同研究者がいたので何度か訪れたことがあり、分野にこだわらず、本質的な質問から始まる研究環境に惹かれたことが、応募のきっかけでした。1次選考は書類審査、2次選考は研究発表と面接で、二日間にかけて行われます。研究発表はオープンで、大学院生も聞きにきます。その後、他の候補者と一緒に食事をしたり、研究室見学に行ったりしてお互いの専門分野の話をするので、該当ポストに関しての2次選考の倍率について、ついつい考えてしまいます。採用基準としては、独立したグループをつくっていく能力と展望をもっているか、という点が評価されるようです。私の場合は、当時、募集要項に該当する主要な論文がまだ出版されていなかったのですが、こういったことをやっていきたいという部分が大学の戦略的な研究計画に合致したところも、採用の理由だったのかなと思います。

**研究環境に関して:** Lecturerのポストが研究室主宰者のポストなので、若手の研究者が研究室主宰者になるステップとしておすすめです。着任後は、インキュベーション期間として、担当授業も少なく、学部の運営に関する仕事も最小限なので、着任後3-5年間は研究グループの立ち上げに集中できる環境が準備されていました。また、スタートアップの研究費や、シニアスタッフのメンターもつくので、研究グループ立ち上げのためのサポートはとてもありがたかったです。

**研究費に関して:** 基礎研究であっても、社会にいかに関与するか、その道筋を考えることが重要なようです。いわゆるImpact Sectionを書くのが大変なことと、新規性と実現性のバランスが難しいと感じています。採択率は10%を切る場合がほとんどなようで、競争的研究費の獲得は大変です。最近、返ってきた

Reviewerからのコメントをみると、共同研究のネットワークにより、応用研究を実現させるまでの道筋が具体的に求められていると思います。研究グループをつくり、基礎から応用まで、融合分野での幅広い研究提案が求められているので、JSPS Londonの在英研究者の集まりはよい機会を与えていただきました。イギリスで長年、活躍している先生方や新しく研究室を立ち上げた方と知り合うことができ、今後、実質的なネットワークづくりを日本にいる研究者との連携も含めて、できればと思っています。

**教育に関して:** 授業の期間の10月から3月までに、平均的に50分の授業を週2回、もてばよいようで、基本的に各教員あたりの授業分担は少ないと思います。Research & Teachingの雇用条件として、Postgraduate Certificate in Academic Practiceの取得が必要です。教育者としてのトレーニングで、教育に関する修士号に相当するようで、毎週のように授業とワークショップに参加してきました。重要なポイントは、学生さんがProfessional learner(Kolb's cycle)になれるように、グループ学習、問題解決型学習などのActive learning方法論や、教育学の基礎を学びます。

現在、新しいBio-medical Engineering学科の設立のためのミーティングに参加し、そのためのビジネスプランを議論しています。たとえば、スタッフの給料とバランスさせるために必要な学部生の数や、研究費の獲得、次のREF(研究ユニットのランキング制度)の対策を議論しています。イギリスの大学の経営は、すごくダイナミックで、学部レベルの再編が数年の期間で活発に行われ、新陳代謝が促されています。

最後に、このレディングという比較的ちいさな街は暮らしやすいです。周りの人たちも親切で、家族ともども楽しく過ごしています。息子は2歳半でイギリスに来て、英語が話せないまま4歳で小学校に入学しましたが、先生のフォローや優しい友達に囲まれたおかげで、5歳の今では割と上手に英語を話しています。また、息子の通っている小学校は少人数制で、個人のアイデアや表現力を特に大事にしているようで、いつも学校での授業の様子を楽しそうに聞かせてくれます。

一度、海外の研究環境で、研究がしたい人がいましたら、レディング大学を案内しますので、ご連絡をいただければと思います。

## | 英国の大学紹介

スコットランドの「努力の地」で勉学に励む  
～スターリング大学の場合～

## スターリングを制するものがスコットランドを制する

スコットランドには雨に関する言葉が50個以上あるそうだ。実際、昨年秋に筆者がスコットランドを訪問した際も、雨が断続的に降ったり止んだりを繰り返していた。それ故、時折雲の合間から見える日差しが格別に清々しい。

スターリングは、スコットランドの首都であり情緒深い古都エジンバラと、文化・芸術の発信地でありスコットランド最大の都市グラスゴーから共に近く、古くから「スターリングを制するものがスコットランドを制する」と言われるほど重要な土地であり、何世紀にも渡る戦いの舞台となってきた。町の名前の由来が「努力の地」であるように、スコットランドの人々にとって「独立の象徴」とも言える場所である。

## スターリング大学

スターリング大学は、スターリングのメイン・キャンパスの他に、ネッシーでお馴染みのネス湖に程近い都市インヴァネスとヘブリディーズ諸島の中心都市ストーンウェイにもキャンパスを所有している。同大学のキャンパスの美しさには定評があり、メイン・キャンパスは人造湖であるアースレー湖を囲むように建物が配置されており、学生が勉強の合間に湖のほとりでリフレッシュしている。

学生の5人に1人が留学生であり、115ヶ国以上の国から集まっている。毎年130名程度の日本人留学生が同大学に留学しており、学部生における出身国別留学生数では日本が上位5ヶ国に入っている。

また、留学生の送り出しにも積極的で、現在10%の学部生が学位プログラムの一環として海外に留学しているが、これを2019年までに30%まで高めることを目標としている。

卓越した研究分野として、REF (The Research Excellence Framework) 2014において、農学、獣医学、食品科学の3分野が英国大学中第4位にランク付けされている。

また、同大学は、スコットランド政府に「スコットランドで最も優れたスポーツ環境の整った学校の一つ」と認められるほど、スポーツ教育で優秀な大学でもあり、たくさんの優れたアスリートを輩出している。スポーツ施設も充実しており、キャンパス内にゴルフコースを所有しているほどである。

日本の大学とのコラボレーションにも積極的であり、現在10校近隣の日本の大学と学術交流を行っている。中でも、早稲田大学及び関西学院大学との交換留学は20年以上の歴史がある。

さらに、2016年度より関西学院大学の言語コミュニケーション文化研究科との間でダブルディグリーコースが新設される予定である(2016年3月本記事執筆時点)。



キャンパス内にある緑豊かなアースレー湖

大学基本情報	
学生数	学部生7,652名 / 院生3,438名
学生構成	UK 78% / EU 6% / Other 15%
学術的強み	農学、獣医学、食品科学、スポーツ教育
学術交流を行っている日本の大学	早稲田大学、関西学院大学、筑波大学、立教大学、国際教養大学、他
Alumni	0名 (JSPS同窓会員)
JBUK	2名 (在英日本人研究者等)

(岡田)

## | 英国の大学紹介

150年の歴史が紡ぐ日英交流  
～University College London (UCL) の場合～

2015年4月に渡英以来、早いもので1年が経過しようとしている。本稿の発行時点(5月)には、JSPS国際協力員としての任期を終え、本務先の長崎大学で新たな業務に従事していることだろう。長崎大学職員であるものの、鹿児島県出身者として、最後に、故郷に縁のあるUniversity College London(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)(UCL)を紹介したい。

## 開かれた大学 ～自由・平等主義、そして無宗教～

英国の大学と言え、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学の名前がまず思い浮かぶと思うが、兩名門校が男性、イギリス国教徒、貴族出身者のみに入学を制限していた19世紀、人種、宗教、階級に関わりなく広く人々に教育を施すことを理念に、1826年に創設された大学がUCL(※1)である(イングランドで3番目に古く、ロンドンでは初めての大学)。1878年には、イングランドで初めて、男性と同一の条件下で女性にも門戸を開いた大学としても有名。当時、その無宗教性から、大学がある通りにちなんで“The Godless College in Gower Street”(ガウアー通りの無神大学)(筆者仮訳)と揶揄されていたようだが、キリスト教思想を否定する考えとして他大学での発表を拒まれていたチャールズ・ダーウィンの「進化論」が1859年にUCLで発表されるなど、学術の発展に寄与した功績は大きい。



約150年前と変わらない姿のMain building 正面玄関  
建学の精神は今も生きている

## 時は150年前に遡り ～薩摩スチューデント～

開かれた大学の下で、幕末から明治維新にかけて多くの日本人留學生が学び、後に明治政府の設立や日本の近代化に大きく貢献したことは広く知られている。中でも、今から約150年前、国禁を犯して渡英した「長州ファイブ(五傑)」「(1863年)と「薩摩スチューデント」「(薩摩19(ナインティーン))」「(薩摩藩英国留學生)とも言われる。」(1865年)(※2)は有名だろう。キャンパス内には、彼らを称えた記念碑が設置されている。



石碑には、24名の名前とともに、“1863年及び1865年にUCLを訪れ学んだ、日本の先駆者達を称えて”と刻まれている。

1863年の薩英戦争の敗北を機に、西洋の進んだ技術・知識を学ぶためにUCLへ派遣された薩摩スチューデント。帰国後は、商法講習所(一橋大学の前身)の設立や初代文部大臣として教育制度改革に取り組んだ森有礼、東京開成学校(東京大学の前身)の初代校長となった畠山義成、初代在英日本行使、明治政府の外務卿として自主外交確立と不平等条約改正に尽力した寺島宗則、大阪株式取引所、商工会議所を設立し、関西財界の基礎を築いた五大友厚、開拓使麦酒醸造所(サッポロビールの前身)の創設者となる村橋久成など、教育、外交、実業界等様々な分野で重要な役割を果たしている。

UCLの当時の常識を覆す自由な学風と進取の精神がなければ、日本の近代化は後何十年と遅れていたかもしれない。

※1: London Universityとして創設された後、1836年にKing's College Londonとともに2つの大学がカレッジになる形でロンドン大学(University of London)が発足。その際に大学名称も変更された。

※2: 薩摩藩英国留學生記念館ホームページ(<http://www.ssmuseum.jp/>)



## | 英国の大学紹介

150年の歴史が紡ぐ日英交流  
～University College London (UCL) の場合～ 続き

## 150年後の今 ～ UCL is London's Global University ～

翻って約150年を経た今、UCLは、英国、世界を先導する大学の一つと言っても過言ではない。研究志向の総合大学としてラッセル・グループの一角を成し、自然科学・工学系から人文・社会科学系に至る幅広い分野において世界トップクラスの研究成果、研究力、社会へのインパクトを誇っている。英国大学研究評価(REF)2014での評価も極めて高く(※3)、REFの結果を踏まえた研究助成配分では英国内で2番目の増額を獲得。THE世界大学ランキング2015/2016では14位(英国内4位)、QS世界大学ランキング2015/2016でも7位(英国内3位)に輝くなど、国内外の大学ランキングでは常に上位に位置し、今もなお世界中の多くの若者を魅了し続けている(学生の約1割がEU圏内、約3割がEU圏外からの留学生が占める)。

## 歴史が紡ぐ日英交流 ～ UCL × 山口、鹿児島、そして～

「長州ファイブ」、「薩摩スチューデント」の歴史は150年後の現在もUCLと長州(山口)、薩摩(鹿児島)を強く結び付けている。とりわけ、留学生が渡英して150年目の節目に当たる2013年には、長州ファイブ来英150周年関連行事として、UCL等で日英交流の記念イベントが盛大に行われるとともに、2015年には、鹿児島から高校生を中心とした現代版薩摩スチューデント19名が派遣され、UCLにおいて地元高校生との交流プログラムや150周年記念セレモニーが開催された。この他にも、2013年以降、日英の優秀な高校生を対象として、世界の共通課題について専門の研究者等との意見交換を目的とした「UCL-Japan Grand Challenge Event」がUCLの公式行事として開催されるなど、積極的な日英交流が図られている。

また、大学(学術交流)レベルでも、山口大学は、「長州ファイ

ブ」を記念した化学分野の学術シンポジウムを毎年UCLと共同開催しており、2016年3月16、17日には第9回目となる「The 9<sup>th</sup> Choshu-London Symposium (UCL-Yamaguchi Symposium) ”(※4)をUCLで開催するなど、息の長い交流を続けている(JSPSロンドン後援)。

さらに、2016年には、JSPS在英日本人研究者ネットワーク(JBUK)のメンバーでもある大沼信一教授(Institute of Ophthalmology, UCL)の主催の下、日英交流に興味のある研究者・学生を対象に、日英(学術)交流プログラム、助成事業について紹介を行う「Japan Day at UCL」(※5)が初めて開催され、UCLを基点とした日本との日英(学術)交流の輪は、山口、鹿児島を超えて日本全体に広がりを見せている。

最後に、薩摩スチューデントが出国した鹿児島の「羽島」を母の故郷にもつ筆者だが、恥ずかしながらUCLを訪問して初めてその歴史を知ることとなった。もし歴史が大学に使命を与えんとするならば、先人が紡いだ日英の交流が絶えることなく、これから先もさらに飛躍・発展することを願うばかりである。

大学基本情報	
学生数	学部生16,830名 / 院生18,785名
学生構成	UK 62% / EU 11% / Other 27%
学部等	Arts & Humanities, Built Environment, Brain Sciences, Engineering, UCL Institute of Education, Laws, Life Sciences, Mathematical & Physical Sciences, Medical Sciences, Population Health Sciences, Social & Historical Sciences etc.
キーワード	長州ファイブ、薩摩スチューデント、自由・平等主義、無宗教、ロンドン最古の大学、ラッセル・グループ、ゴールドデン・トライアングル、ヨーロッパ研究大学連盟、夏目漱石
学術交流締結校	山口大学、東北大学、東京大学、大阪大学、首都大学東京、国際基督教大学 等
Alumni	28名 (JSPS同窓会員)
JBUK	58名 (在英日本人研究者等)

(亀澤)

※3: REF2014の評価結果は以下のホームページを参照 (<http://www.ucl.ac.uk/news/news-articles/1214/181214-ucl-results-ref>)

※4: 15頁「Choshu-London Symposium」参照

※5: 12頁「Japan Day at University College London」参照

## ● ぽりーさんの英国玉手箱 ●



### Q 何でも自分で直す英国人？

英国で“DIY”という言葉をよく耳にします。テレビ番組でも、自分たちで家や庭のリフォームをしている様子が放送されていますが、どの程度の修繕を自分たちでやってしまうのでしょうか。



**A** 昔から英国には、家のリフォームから庭の整備まで“何でも自分でやっってしまう(DIY: Do It Yourself)”精神が根付いており、親から子へ修繕の知恵が受け継がれています。

DIY関連の大型チェーン店として、B&Q, Homebase, Wicks, Screwfixなどがあります。そこには家のリフォームに関するありとあらゆる備品が揃っています。イースター、夏休み、クリスマス、お正月などの休暇時期には必ず大々的なセールをして人々にこの時期のDIYを推奨しています。

また、住宅改善は持ち家の人たちにとても人気のある趣味でもあります。台所や風呂場の水周りのリフォームや庭の整備などを自力でやっしまいます。リフォームに必要な備品が手頃な価格で簡単に手に入り、また自分たちでやるほうが思い通りに出来て都合がいいからです。典型的なリフォームといえば、床のタイルの張替え、暖房設備の取り付け、照明器具の設置、呼び鈴の修理、電話差込口の取替え、ランプのコードの取替え、オーブンを台所に設置する等です。洗濯機、自動食洗機の設置、流し台の漏れや詰まりを直すなど、配管工事までも自力でやっしまいます。

家の中だけでなく、中庭のデッキを造ったり、芝を植えたり、なんと池まで作っしまいます。排水関係も自分達でやっしまいますが、英国は雨が多いので、これはとても大切な技術です。

しかしながら、世代によってDIYに対する考え方の違

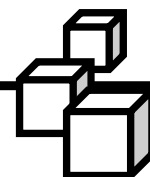
いがあります。例えば45歳以上であれば取り付け作業はもちろん、壊れたものを何度も何度も修理して使い続ける傾向がありますが、若い世代は、新しく買った方が安く簡単であればすぐに修理をあきらめてしまいがちです。

もちろん、自分達ですべてやるということに、条例や法律の規定で限界があります。例えば電気系統は資格を持った専門家がやらないといけませんし、家の増築や壁を取り外すなどの家の構造を変更する場合もプロの大工に任せないとはいけません。最後にプロの大工はその仕事を証明する書類にサインをします。そうでなければ家を売るとき難しくなるからです。

ところが、賃貸の場合は若干状況が異なります。というのは大家が家の維持に関して責任があるからです。そのため、多くの大家は維持費を削るため自分で修理をします。DIYでやる本格的な家の改装も、安上がりで、早く家の転売ができ、利益も出るという理由で人気です。仮にすぐに売れなくても短期間の賃貸をして、その後売りに出します。早く売却して次の物件を購入してまた新たに改装をします。これは賃貸者にとって長期間借りることが難しくなることを意味します。

南東ロンドンにはロンドン中心に近く便利なのでとても人気が高く、家賃も高額です。この地区の持ち家の人宛に、賃貸業者から自家を貸し出すことを勧めるDMがよく届きます。そのため、現在の家を賃貸にしてその収入で他の物件を購入するケースが増えています。

Events organized/supported by JSPS London  
from February to April 2016



3rd February 2016

11th JBUK Meeting

at Daiwa Foundation Japan House, organized by JSPS

4th February 2016

Japanese Studies Post-graduate Workshop 2016

At Holiday Inn London, organized by the Japan Foundation and British Association for Japanese Studies

(JSPS gave a talk on JSPS fellowship programmes during the workshop.)

5th February 2016

Japan Day: Ever considered studying in Japan?

at University College London, co-supported by Embassy of Japan in the UK, Daiwa Anglo-Japanese Foundation, The Great Britain Sasakawa Foundation, and JSPS

11th February 2016

JSPS Programme Information Event

at Newcastle University

22nd February 2016

Training Seminar: Opportunities for EU-Japan Research Collaboration -Training for Japanese Research Administrators and Researchers from EU and Japan-

at Hotel ibis London Euston at St. Pancras, organized by Kobe University and JEUPISTE, supported by JSPS

23rd February 2016

LLAKES Research Seminar: Education Policy and Equal Opportunity in Japan

at Institute of Education, University College London, supported by JSPS

24th February 2016

JSPS Programme Information Event

at University of Kent

4th March 2016

UK-Japan Collaboration Public Lecture: The Past and Future Earth - Climate change and co-existing sustainably with nature

at Embassy of Japan in the UK, organized by Ritsumeikan University, supported by JSPS

9th March 2016

JSPS Programme Information Event

at the University of Surrey

16th-17th March 2016

The 9th Choshu-London Symposium

at Department of Chemistry, University College London, organized by Yamaguchi university, supported by JSPS

15th April 2016

JSPS London Pre Departure Seminar and Alumni Evening

at JSPS London



## | Recent Activities

LLAKES Research Seminar  
(Supported by JSPS London)

### Education Policy and Equal Opportunity in Japan

UCL Institute of Education  
Tuesday 23rd February 2016

Prof. Akito Okada of Tokyo University for Foreign Studies gave the presentation at LLAKES Research Seminar during his research visit to UCL. He reports the seminar and its fruitful discussion.

The Centre for Learning and Life Chances in Knowledge Economies and Societies (LLAKES), Institute of Education (IOE), University College London (UCL) holds a public seminar series throughout the academic year alongside one-off events. LLAKES is an ESRC-funded Research Centre which investigates the role of lifelong learning in promoting economic competitiveness and social cohesion.

The idea of the LLAKES seminars is to present recent research work, on themes similar to or linked with those of the LLAKES Centre. Sometimes these seminars are based specifically on LLAKES projects, but these draw on speakers from external organisations to provide different perspectives. The main focus of LLAKES is how education can be used, throughout people's lifetimes, to promote both economic competitiveness and social cohesion.

As one of the public seminars of the LLAKES, Professor Akito OKADA, Visiting Fellow at UCL, spoke about "Education Policy and Equal Opportunity in Japan." Professor Andy Green, a member of LLAKES, made welcoming remarks and an introduction to the topic for those in the audience. This presentation aimed to throw light on the evolution and historical transformation of the concept of equality of opportunity as applied to educational policies in Japan from the end of World War II to the present day. It analysed the Central Council for Education's (CCE: Chūō kyōiku shingikai) reform proposals in recent years, and placed them in the context of developing the concept of equality of educational opportunity in the years since 1945, when the post-war education system was established in Japan.

More specifically, the seminar addresses the following questions. What kinds of equality of educational opportunity have the central administrative bodies (the Ministry of



Prof. Akito Okada, the speaker of the seminar

Education or the CCE), the political parties (mainly the Liberal Democratic Party), and teachers, aimed to achieve since the war? How have they applied equality of opportunity to educational policies? What kinds of criteria are used by them to measure equality of educational opportunity?

The presentation also expanded on the existing literature on educational policies in contemporary Japan by examining how the current educational reform efforts have affected equality of educational opportunity among children from different family backgrounds.

This presentation was 90 minutes, 1 hour presentation and 30 minutes question and answer time. The audience of about twenty-five was mainly composed of professors and academic staff of the LLAKES, visiting researchers from Japan, graduate students belonging to all departments of the University of London, and the general public. They heard the presentation and shared the time to exchange their opinions about recent education reforms in Japan.

This presentation was supported by JSPS London. This presentation was a great success thanks to the participation and the cooperation of various people. I hope that Japanese and British researchers will have further similar opportunities of effective interchange from now on in a tie-up with the JSPS network.

**Akito Okada** is Professor of Comparative and International Education at Tokyo University for Foreign Studies. He received his PhD in Education from Oxford University. He is known for his research on equality of opportunity in Japanese education in comparative and international perspective. He is the author of *Education and Equal Opportunity in Japan* (2011, Berghahn). He is a Visiting Professor, University College London from October 2015 to March 2016.

## | Recent Activities

### Pre information event for JSPS fellows Pre Departure Seminar and Alumni Evening

JSPS London  
Friday, 15<sup>th</sup> April 2016

A seminar combining a Japanese class for beginners and information about preparations for a research trip to Japan was organised by JSPS London. Participants included recent awardees of several types of JSPS Fellowships. After the seminar, we got further participants from Alumni and JBUK members and had Alumni evening.



Participants of alumni evening. Prof. Takeyasu is centre and Dr. Goodridge is third from the right in the front row.

The seminar started with the Japanese language class. The teacher was Mr. Makoto Netsu, Chief Japanese language Advisor at The Japan Foundation London. This lesson covered words and phrases for practical everyday situations both for living and working in Japan including self-introductions in order that fellows are able to simply explain about their research area. Basic language to be able to shop, order food and make travel arrangements while in Japan was also taught. Participants learned to read hiragana and katakana and were taught how to write their own name in katakana as well.

After a short break, the next segment of the seminar began and included formal presentations on pre departure preparations from JSPS staff and Alumni. This session started with welcoming remarks from the Director of JSPS London, Professor Kunio Takeyasu and was followed by a short self-introduction from each participant. The purpose of these self-introductions was for fellows to link similar areas of research and institutions being visited overall. In this group our fellows will be visiting a varied array of departments at top universities and research institutions all over Japan, from the Faculty of Engineering at the University of the Ryukyus in the south, to the Biotechnology Centre at Akita Prefectural University in northern Japan. The seminar was presided over by Ms. Polly Watson, International Programme Coordinator of JSPS London,

who at first explained the purpose of the event and about the different presentations that were to follow. The first presentation by Ms. Chigusa Ogaya, Deputy Director of JSPS London, gave an essential introduction to JSPS, the preparation JSPS researchers need to make and kinds of assistance available from JSPS. This was followed by a presentation from Ms. Yumiko Kusune, International Programme Associate, about preparations specifically for the Summer Programme and also included generic information on the procedure for booking flights, receiving funds and travel insurance applicable to all JSPS Fellows. Two JSPS UK & RoI Alumni Association members spoke next about their experiences of research environments



The Japanese language lesson

## | Recent Activities

and living in Japan. Ms. Maxine Gee from the University of York and Dr. Gorana Pobric from the University of Manchester gave very thoughtful and practical advice touching on a wide breadth of topics from etiquette and typical protocols that should be followed in the work place to access to WiFi and dealing with complex recycling systems. Dr. Pobric emphasised the importance of getting the most out of a JSPS Fellowship and how she has used several sources of JSPS funding to build productive research networks in Japan that have helped to advance her career overall. JSPS London was also pleased to have in attendance guest speakers Ms. Julie Anne Robb from the Japan Foundation and Mr. Rory Steele from the Great Britain Sasakawa Foundation. Both gave presentations on the activities of their organisations to make seminar participants aware about further funding opportunities they offer to do

research in Japan.

After the pre-departure seminar, the UK & RoI JSPS Alumni Association held an alumni evening and farewell reception for Professor Takeyasu to allow for networking among members and new JSPS fellows in a relaxed atmosphere. The evening started with a presentation from Dr. Ruth Goodridge to explain about the recent and future activities of the UK & RoI JSPS Alumni Association, including recent awards made under the BRIDGE Fellowship and Symposium Scheme as sources of funding available exclusively to Alumni Association members. Professor Takeyasu then gave a speech thanking colleagues for their support during his tenure as Director of JSPS London and spoke of future his plans. This speech was followed by a drinks reception and buffet to allow for networking and the chance for further information exchange between new fellows and Alumni in preparation for their trips to Japan.



Self introduction



“Preparations for a research trip to Japan”, presentation from Ms. Maxine Gee



Research Environment in Japanese and UK Institutions, Presentation from Dr. Gorana Pobric



Networking time



## | Recent Activities

Comments from attendees:

● **Mr. Szymon Parzniewski (University of Birmingham), 2016 Summer Programme Fellow**

“The pre-departure event was a great opportunity to liaise with other nominees and to gain some valuable insights into the JSPS Summer Programme 2016. It enabled me to get first-hand practical information about the programme and learn from the experience of JSPS Alumni. I really enjoyed the Japanese language class, which included lots of everyday language hints and additional material for self-practice before I leave. Overall, a very useful experience, motivating me to learn more about Japan and reach out for the range of research opportunities available.”

● **Dr. Angelika Koch (University of Cambridge), Short Term Pre/Postdoctoral Fellow**

“I thought that the event was a great opportunity to meet other outgoing fellows and get an impression of the astounding range of subjects they work on. With representatives of the Alumni Association and previous fellows attending the event, as well, it felt like a JSPS grant was more than just a fellowship one takes up for a couple of months; it was about entering a diverse community of researchers and building connections.”

● **Dr. Andrew Houwen (University of Reading), Standard Postdoctoral Fellow**

“I found the pre-departure seminar and alumni evening an extremely valuable experience. It allowed me to form connections with other fellowship awardees about to depart, which allowed us to share concerns and ideas; it gave me the opportunity to ask important questions both to JSPS staff and those who had previously been awarded fellowships; and the presentations and detailed information packs also gave very useful pre-departure information. Above all, it gave awardees a warm welcome to Japanese culture as well as a strong sense that we are valued and that we have been made part of a supportive community.”

● **Professor Peter Holland (University of Oxford), Short Term Invitation Fellow**

“In November and December 2016, I will be giving seminars in Tokyo, Tsukuba, Kobe and Kyoto, and collaborating with researchers at the Okinawa Institute of Science and Technology, supported by a JSPS Invitation Fellowship. This will be my 15th visit to Japan, although my first JSPS fellowship. So what did I get from attending the JSPS Pre-departure seminar (apart from a nice sushi and tempura reception)? I found the event particularly useful for meeting JSPS staff, learning about the Alumni association and hearing about other funding opportunities. I was also inspired by the dedication of the JSPS in working to support research links between our countries.

## Vol.3 Dr Wolf-Peter Schmidt



Dr Wolf-Peter Schmidt had visited Nagasaki University in 2009-2010 as a JSPS Postdoctoral Fellow. A bunch of these individual research exchanges between LSHTM and Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University have now developed into institutional collaboration. Dr. Schmidt tells what led him to Nagasaki and his days in Japan.

My home town is a small seaport in northern Germany. It is famous only for its annual sailing festival, hosted by the snobbish Kiel Yacht Club. In early 1993, a Japanese delegation came to learn from the club's experience in hosting large sailing events and invited a high ranking club official to attend their event in Japan. Someone decided to send along two young sailors from the club. My friend and I were chosen because we were the only club members under 19 years able to leave for Japan within 48 hours. We spent a memorable fortnight in Kamakura, sailing with Fuji-san in sight, often into the wrong direction and either too early or too late over the starting line. Our Japanese hosts celebrated us nevertheless. It was the old Japanese tradition of glorifying the efforts made by a losing party, as depicted in the famous Tales of the Heike.

Sixteen years later I was working as an epidemiologist at the London School of Hygiene and Tropical Medicine. Over much of this time I had been ready to leave for Japan within 48 hours or even less if needed. But time and again the Japanese delegations coming to the School walked past my desk down the corridor towards the office of Professor Brian Greenwood who they awarded the first Hideyo Noguchi Africa Award for outstanding achievements in the field of Tropical Medicine.

### **Dr Wolf-Peter Schmidt**

Lecturer, London School of Hygiene and Tropical Medicine (LSHTM) and Medical Registrar, Christian Medical College, India

#### Biography

1993-2000 Medical Studies, University of Hamburg  
2002-2003 Research Fellow, University of Muenster  
2003-2004 MSc Control of Infectious Diseases, LSHTM  
2005-2008 Research Fellow, LSHTM  
2007-2009 PhD Epidemiology, LSHTM  
2009-2010 JSPS Research Fellow, Nagasaki University  
2010-2016 Lecturer, LSHTM  
2014-2016 Medical Registrar, Christian Medical College, India

#### JSPS Concerning

• 2009.12-2010.12 JSPS Postdoctoral Fellowship (Short-term)

Brian had contacts at the Institute of Tropical Medicine at Nagasaki University who were keen to collaborate with LSHTM. He introduced me to Professor Koya Ariyoshi of the Department for Clinical Medicine at the Institute. One of their Researchers, Dr Motoi Suzuki, was at the time doing his Master in Public Health at the School. Motoi was already an expert in International Health, with an impressive CV, but he wanted to obtain more quantitative, analytical skills. It turned out that in Nagasaki, there was a large dataset from Vietnam which they had collected a couple of years earlier but never got around to analysing it much. Motoi and I developed a proposal for a one-year fellowship at the Institute, which was approved by JSPS.

When I came to Nagasaki it was winter and the city was under a rare layer of snow covering the dense subtropical vegetation of the mountains surrounding the city on all sides. At the Institute of Tropical Medicine, there were researchers from many countries, especially from Vietnam. Most were involved in molecular and microbiological studies, but there was also an interest to link these fields with the epidemiological data collected at field sites in Vietnam and Thailand. With our experience from LSHTM, Motoi and I contributed to the works of others in the department, apart from pursuing the research plan

agreed by JSPS. I became involved with the analysis of an HIV cohort from Thailand led by Dr Naho Tsuchiya who after years of research in Thailand had finally returned to Japan. She was married to a Thai who was a good cook and a devoted Buddhist. I worked with a PhD student from Vietnam, Dr Huong, on her analysis of pneumococcal infections in Vietnamese children. Huong had been in Nagasaki for over three years. Apart from being a skilled microbiologist, she knew everything about Japanese people, Japanese festivals, Japanese proverbs and Japanese food. She knew which Japanese flower blossomed at which time of the year, which pickled vegetable to eat when, how to prepare and when to avoid it. Her group was led by Dr Lay Myint who originated from Myanmar. He seemed to be very happy in Japan, and had adopted the surname Yoshida. Lay Myint was deeply involved with the department's work in Vietnam. A further PhD student from Vietnam, Dr Thiem, was working on diarrhoeal diseases, which was my own area of interest.

Motoi and I analysed the existing dataset from Vietnam from various angles, but finally settled on the dengue fever data. Dengue is one of the few tropical diseases assumed to be more common in cities than in rural areas. Outbreaks in cities attract considerable attention, because this is where politicians, journalists and public health professionals tend to live. Efforts to control the mosquito vectors transmitting the virus usually focus on cities. Motoi and I were able to show that Dengue was in fact much more common in the rural areas surrounding the urban centres at our study site, and provided a mathematical model exploring why this might be the case. We published our findings in *PLoS Medicine*<sup>1</sup>, which is widely regarded as the best of the mediocre journals.

For the first nine months in Nagasaki I was living in a students' accommodation off site which had apartments meant for foreign guest researchers, and then moved to a private flat near the institute, just opposite the shrine with the large Camphor tree, which had earlier been torn in half but still blossomed. Although I have not seen that much of Japan I would prefer Nagasaki over

any other Japanese city. On weekends I explored the prefecture

by bus, along the coast of the hidden Christians, the Omura-Bay, or the area around Mogi which was famous for Biwa fruits. Mogi was also good for swimming and mountain walks, if one were able to avoid the wild boars. The villages lie along the slope of the Nagasaki peninsula. Steep orchards of Biwa, mandarins and grapefruits extend into the mountains. A Japanese sense of nostalgia can be felt in these villages where the average age of the population must be above 70, and where some old farming houses were already abandoned and terraced fields had become overgrown with jungle and giant bamboo. Old grannies were breaking their backs in the orchards wielding their machetes. Their husbands if they had not already died of chain-smoking could be found by the sea, sitting on the volcanic rocks fishing, or diving into the water in search for sea urchins which are best eaten raw. The food was better here than in Nagasaki City, where owing to earlier Portuguese and Chinese influence, dishes are traditionally prepared with too much sugar and oil.

In the *Tales of the Heike*, the bells of the Gion Temple announce the impermanence of all things. Towards the end of my year in Nagasaki I realised that I did not know what to do next. I flew to Hanoi to spend some time at the home institute of our Vietnamese colleagues, meeting Dr Thiem and Dr Huong who had both returned to Vietnam. Professor Ariyoshi had alerted me to some PhD emergency faced by Dr Thiem, and asked me to help sort it out, but on arrival it turned out the situation was not quite as dire as feared. We quickly resolved the issues, and Dr Thiem submitted his paper. From Hanoi I flew to India, where my own group in London had set up a new field site. I was meant to stay in India for two weeks, but these turned into months and years, and I am still in India while writing this article. I often think back to my time in Nagasaki, where the people are calm, the air is fresh, and the food clearly identifiable. In the meantime, LSHTM and the Institute of Tropical Medicine in Nagasaki have established a more formal collaboration. The institute has been transformed into a major school of public health. While I am still in frequent contact with Nagasaki over joint projects for our Master students, I am hoping for another opportunity to spend time there myself.

1. Schmidt W-P, Suzuki M, Dinh Thiem V, White RG, Tsuzuki A, Yoshida L-M, et al. (2011) Population Density, Water Supply, and the Risk of Dengue Fever in Vietnam: Cohort Study and Spatial Analysis. *PLoS Med* 8(8): e1001082



This page provides you the useful information about JSPS Programmes and events. Please check each website page for more details.

Application periods for these programmes are around the same time every year so you can apply for next year (or next call) if you cannot prepare your application for this call.

## JSPS Fellowship Programmes

\*These application periods are for the head of the host institution to submit applications to JSPS Tokyo; the time frames for host researchers to submit their applications to their institution are normally earlier. Therefore, Fellowship candidates must discuss their preparation schedules with their host researchers.

### ◆ Postdoctoral Fellowship Programmes (Short-term/ Standard/ Pathway)

#### Short-term for North American and European Researchers

Call for FY2016 (4<sup>th</sup> Recruitment)

Duration: 1 to 12 months

Application Period: 6- 10, Jun 2016

Commencement: 1, Jan 2017– 31, Mar 2017

<http://www.jsps.go.jp/english/e-fellow/application.html>

\*JSPS London also receives applications for Postdoctoral Fellowship (Short-term) twice a year, usually in June and December.

Call for FY2016 (2<sup>nd</sup> Recruitment)

Applications need to be sent to JSPS London DIRECTLY.

Application deadline: 08, June 2016

Commencement: 1, Nov 2016 – 31, Mar 2017

<http://www.jsps.org/funding/>

#### Standard

Call for FY2017 (1<sup>st</sup> Recruitment)

Duration: 12 to 24 months

Application Period: 29,AUG 2016 – 02,SEP 2016

Commencement: 1, Apr 2017– 30, SEP 2017

<http://www.jsps.go.jp/english/e-fellow/application.html>

\*JSPS also receives applications for Standard fellowship through nominating authorities in the UK. For information on the application procedure, please contact directly the nominating authorities which are **British Academy** (for all fields of the humanities and social sciences/ application deadline: usually December every year) and **Royal Society** (for the natural and physical sciences/ application deadline: usually February every year).

BA: <http://www.britac.ac.uk/funding/guide/intl/jspss.cfm>

RS: <https://royalsociety.org/grants-schemes-awards/grants/jspss-postdoctoral>

#### Pathway to University Position in Japan

Call for FY2017

Duration: 12 to 24 months

Application Period: 29, AUG 2016 – 02,SEP 2016

Commencement: 1, Apr 2017– 30, Nov 2017

### ◆ Invitation Fellowship Programmes (Long-term/ Short-term/ Short-term S)

\*These programmes are designed to enable Japanese researchers to invite their overseas colleagues to Japan to participate in cooperative work and other academic activities. Researchers of all countries having diplomatic relations with Japan are eligible. Applications are submitted by the inviting researchers who wish to host overseas researchers in Japan.

JSPS offers three Invitation Fellowships, which are Long-term programme for lecturer to professor level, Short-term for reader and professor etc. level, and Short-term S for distinguished researcher. Please check JSPS website as below for more details.

Call for FY2017 (1<sup>st</sup> Recruitment)\*

#### Long-term

Duration: 2 -10 months

#### Short-term

Duration: 14 to 60 days

#### Short-term S

Duration: 7 to 30 days

Application period: 29,AUG – 02, SEP 2016

Commencement: 1, Apr 2017– 31, Mar 2018

\*Long-term has only one recruitment a year.

<http://www.jsps.go.jp/english/e-inv/index.html>

## JSPS London Events & Useful Information

### ◆ Symposium

- 13 JUN 2016: UK-Japan Symposium on Research Advances in Carbon Nanomaterials @ Royal Society of Chemistry
- 04 - 05 JUL 2016: UK-Japan Symposium: From Single Molecules to Cells and Tissues @Leicester University
- 14 - 15 JUL 2016: UK-Japan Seminar on Bio-Inspired Soft Robotics @Univ. of Cambridge

### ◆ JSPS Programme Information Event

- On 31 May 2016 at Oxford Brookes University
- On 23 Jun 2016 at Trinity College, Dublin

\*JSPS London visits universities in the UK time to time, to have a programme information event to introduce and explain our

funding programmes. If you have any interest, please contact JSPS London.

### ◆ Useful Information

For Japanese researchers in the UK/ 在英日本人研究者の皆様、ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。対象は、英国の大学・研究機関に所属する研究者(ポスドク・大学院生含む)及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。下記リンクにてご登録ください。

<https://ssl.jsps.org/members/?page=regist>

JSPS Tokyo が運営するJSPS Monthly (学振便り)は、JSPS の公募案内や活動報告等を、毎月第1月曜日にお届けするサービスです(日本語のみ/購読無料)。情報提供を希望される方は、下記のリンクにてご登録ください。

<http://www.jsps.go.jp/j-mailmagazine/index.html>



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)  
14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, United Kingdom  
Tel : +44 (0)20 7255 4660 | Fax : +44 (0)20 7255 4669  
E-mail : [enquire@jpsps.org](mailto:enquire@jpsps.org) | <http://www.jsps.org>



JSPSニュースレター  
監修: 上野信雄  
編集長: 大萱千草  
編集担当: 楠根由美子